

送りにならず引き揚げたが、その心身共の苦勞は並大抵ではなかつたらうと子供の私にもひしひしと身にせまるものがあつた。

そんな父を尊敬しながら、私は苦しい日常生活を過ごしていたが、幸いに、母に似て体は父よりも大きく力もあつた。負けん気は父並みだつた。父は学校に行かせる心づもりであつたらしいが、私は「おやじのあとを継ぐには学問はいらぬ、実業でやっていく」という決心で、大工の学校に入り建築業に進んだが、祖父や父の影響を受けてなんでもやってみたく、建設機械の運転士、植木屋などの仕事をやっている。

あの戦前の日本が、もっと平和主義的な生き方をしていたら、立花一家の生き方も変わっていたであろう。あの農村の疲弊がなかつたならば、満州開拓などには行かなかつたであらうし、一家眷族が散り散りになることもなかつたであらう。

祖父、父の生涯を振り返ってみる時、諸手を挙げて時代の流れに乗ってしまった結果の悲惨さをしみじみと感ずるものである。

私は、それからみるとこの平和な時代に人生の大部分を過ごしていることを何よりの幸福と思ひ、その平和を大切にしていくなめの努力を続けたいと思つてゐる。そしてその反面において、祖父、父の生きざまに對しては心から敬意を表すものである。

私の半生記

福島県 秋山 ハルノ

私は、福島県の安達郡玉井村にて農業を営んでいた平栗勝衛の長女として、大正六（一九一七）年に生まれた。父は体格が特別に良く偉丈夫であつた。兵役も甲種合格で、仙台にあつた野砲兵連隊に入り数年の軍隊生活を過ごして除隊し、すぐに結婚した。私は、男二人、女四人の六人姉弟妹の長女であつたが、私だけが父に似て体格が特別に良かった。母は体も小さく弱かつたので、私は小さいときから父を助けて農作業を手伝つたり、家事をしたりなど精いっぱい働いてい

た。

家の働き手であったので結婚も遅れ、妹の方が先に町方に嫁入りし、弟も兵隊に行ってしまった。

玉井村は周囲が山に囲まれていて、その山の中心になっっているのが安達太良山で、それは美しい名山で、あの高村光太郎の『智恵子抄』で有名な山である。

私は農業が好きだったので、結婚ということはあまり考えてもいなかった。世の中はだんだんと戦時体制になり、男子は次から次と出征して行くので、私はお国のためとばかりに一生懸命に働いていた。当時で言えば模範的な農村女性であった。性格的にも明朗で楽天家の方だったので、物事をあまり心配することもなく、この様に働くのが当たり前のことという気持ちでいた。

そんなことで過ごしていたが、昭和二十年の春に世話をする人があって結婚することになった。結婚の相手は秋山文吾という人で、奥さんを病気で亡くし五歳の男の子を抱えた、キリスト教の信者であった。

当時は、満蒙開拓が国策遂行と言って大いに叫ばれ

ていた時代であった。だんだんと戦争は激しさを増してきて、この福島地方にもB29による爆撃や、海岸寄りでは軍艦からの艦砲射撃があり住民は戦々恐々としていたが、満州は内地よりもまだ静かで安全だということ、夫はキリスト教開拓団の一員として渡満することになっていたが、急に奥さんが亡くなり子供連れでは大変なので、嫁さんをもらって夫婦子供の三人で満州へ行くという希望を持っていた。そんな事情で私に白羽の矢が立ったのだった。

本宮町の教会で洗礼を受け、結婚式もそこで挙げた。

母は、満州に行くということではびっくりし大反対だったが、なんとか説き伏せて許しを得た。

子供は、正という五歳になったばかりの男の子だったが、体も大きく丈夫そうな子で、自分のことをター坊、ター坊と言っていた。

乳のたくさん出る乳牛のように大きな夫婦と、実子のように懐いてくれる子供で仲よし家庭になって出発することになった。

私にとっても、満州開拓ということは今までもいろいろと話を聞いていたし、友人などにも既に渡っている人がいて、どちらかといえればあこがれの気持ちの方が強かったので、なんの心配もなく四月になって本宮駅を出発した。

しかし、楽天家の私でも、さすがに大歓送を受けての出発になると、これが今生のお別れかと思ひ不安感も出て、涙が止めどもなく流れてきた。出征兵士を見送るような有様だったが、やはり涙、涙の立立であつた。

全国でも珍しいキリスト教信者だけの開拓移民団で、全国から集まった人たちが総員十一人で、団長は室野玄一牧師だった。室野団長は山梨県の稲作もできないような山間部で、農業をしながら伝道生活をしてきた立派な人格者であつた。

子供の正は、たちまち一行の人気者となり開拓団のマスケットになつていた。そこは信仰で結ばれた人々なので、団結は固く楽しい旅だった。途中、覚悟していたような危険もなく、私たちは天国に向かうような

夢と希望に満ち満ちた旅となつた。

四月中旬、全員無事に三江省樺川県太平鎮村劉家店に到着し、早速に「滿蒙開拓第十四次緑ヶ丘地区基督教集合開拓団」という長つたらしい名前の看板を掲げて、開拓生活の第一歩をしるした。普通は二百戸以上で一つの開拓団と言われているが、それより小規模な百戸以下の開拓団は集合開拓団と言われていた。

団の九人の男性は早速に部落内にあつた一軒の家を借りて、そこをこれからの活動の本拠とした。妻帯者には個室の住居が必要だったが、すぐには手配ができないので、私と正は緑ヶ丘地区の竹崎団長の家に一時預けられて、住居の確保ができるまでの一週間そこでお世話になつた。

目の前に広大な平野が続ぎ、すぐそばには既成の水田と畑があつて、それに囲まれた落ち着いた感じの所とところで、柳樹河と周辺の山々も眺められて自然に恵まれた環境であつて、ほっと安心感が生じてきた。

戦争は日に日に激しさを増しているようで、先住の開拓団員の中からも召集される人が多くなつてきたよ

うだった。私たちの基督教開拓団が入植した部落は、戸数も十戸ちょっとで静かな部落であったが、羊が何十頭も放牧されていて、そこだけが満州という思いを強く感じさせていた。

緑ヶ丘地区の様子もだんだんと分かってくるうちに、福島県人で出生地も私と近い所の安積出身の、立花開一家がいることを知り、地獄で仏に会ったような気持ちになって早速に訪ねた。

会ってからの第一声は、「満州はどこも大変な所だよ」という言葉だった。それは私の胸にも「ずしり」とこたえるものであった。どうというはつきりした理由は分からないが、胸に響くもので、引き揚げてきてからも忘れられない言葉であった。

緑ヶ丘というと、何かしら気持ちの和むしやれた地名だが、それは名だけで、開拓団の内情としてはなかなか大変な所であった。

団員の出入りが、他の開拓団と比べて激しく常に流動的で、十数戸前後の開拓集団では一番貧弱な開拓団と言われていた。

いろいろな事情から竹崎団長の出身県である熊本県からの後続団員の送り出しがなく、所要の団員数を確保するのに苦労をし、挙げ句の果てには他の開拓団からの追放者や義勇隊からの落ちこぼれの者で人員を確保した。やっと満拓公社の年度計画の中に入れられて、数千ヘクタールの土地の割り当てを受けて、昭和十六年の第十次の集合開拓団として入植したが、団員の統制が思うようにならずに、一致団結して開拓に精進するという体制にならず、団員個々の自由奔放な振る舞いが多く集合離散が激しかった。

そのような団内の空気から、せっかく割り当てられた広大な土地も、大半は開墾に手がつかずに遊休地化してしまっていた。満拓公社からもいろいろと指導が行われていた。そんなときに、室野牧師の一行が現地視察にきて、「ここはよい。これこそ基督教開拓団としても大変にふさわしい土地だ！」ということで大いに気に入る、満拓公社も困っていたときなので即座に許可して、土地の半分を分割貸与して基督教開拓団の併存入植が許可されたとのことであった。

先住の竹崎団長は、基督教開拓団と一緒に仕事をすることになったことを知り、驚き、強く反対したが、今までの実績から拒むこともならず、共営することとなった。

このような状況は、ここ緑ヶ丘開拓団のみのことではなく、計画どおりの開拓が進まずに土地が遊んでしまっている開拓団では、往々にして起こり得る問題であった。

このような先住の緑ヶ丘開拓団とは異なり、私たちの基督教開拓団は固い信仰に結ばれていた。室野団長は、山梨県の山の中で農業をしながらの伝道活動に励んでいた少壮気鋭の牧師さんで、「異色の牧師」として名声は高かった。団員は全国から募った信仰心の厚い人々で、農業に対する経験は浅かったが、意気は軒昂たるものがあつた。

建設と開拓とを着実に進め、必ず理想郷を実現させるといふ希望と勇気を持っていた。

外に出れば信仰心で結ばれた人々と、今の苦勞も將來の安定のためと一致団結し、内に入れば夫とこれか

らの夢を語らい、日々しっかりとしてくるター坊が愛しくなり抱きしめてしまふ毎日であつた。

私たちの新居もできて全員での共同生活が始まつた。まず朝の礼拝、そして室野牧師団長の説教、それが終わってから一同揃つての朝食、それから団長自ら先頭に立つての開墾。鍬で掘り、鎌で刈つての作業、牛馬も使わずに広い土地に男たちは挑み、女たちはそれの手助けやら炊事やらで働く。遠くから眺めると極めて小さな黙々とした点の営みのようである。正は、部落に来る満人たちからもかわいがられていた。

春もたけなわになると、仕事にも精が出てきた。周囲には畑と水田が次々と作られ、向こう側の柳樹河がとうとうとして流れて、その周囲には赤、黄、白、など色とりどりの花が咲き出した。郷里では見ることもない美しい景色となつた。想像していただとりの北満の風景で、満州に来た喜びが一度にわき上がってきた。玉井村の父母、弟妹にも見せたい風物詩であつた。

ただ、食べ物や炊事洗濯などの日常生活になると、

やはり「ここはお国の何百里 離れて遠き満州の……」のとおりで、現実是不自由この上ないことであつた。水の味も内地とは異なり味気なかつた。街にも遠く夜はランプ生活で、ほの暗い夜の部屋にいたりやはり故郷が思い出されて、淋しさが募り自然に愚痴が出てくるし涙も流れてしまう。そんなときの唯一の救いは、正の存在だつた。

作業は順調に進み、まず馬鈴薯を植え付けようということになり、立花さんのところをお願いして種芋を買い入れた。そのころは、立花さんのところしか種芋を蓄えている家はなかつた。団長が先頭に立つて植え付け作業が始まり、気持ちも勇み立つた。

団建設のためには、開墾農作業だけでなく設備等のことや、開拓公社との事務処理などもおろそかにはできない仕事であつた。本来ならば団長がしなければならぬ各方面との折衝業務も、団長は、「今、私がしなければならぬことは、食糧の生産確保が第一であり、最重点業務である」と言つて、その仕事に全精力を充たすことを示した。そして、「それらの仕事は、

自分に代わつて秋山君にやつてもらふ。秋山君を団長代理とする」と言い、夫を事務方の責任者に任じた。

最初のころは、緑ヶ丘の開拓団事務所から出張をしていたが、開拓公社との折衝などが増え、だんだんと出張することが多く、かつ長くなつてきた。正と二人の生活が増えて、なんとなく寂しい毎日だつた。

そのうちに、佳木斯に団の出張弁事処を設置することとなり、夫は駐在員となり佳木斯に移つたので、私と正も一緒について行くことになり街中の生活となつた。これが緑ヶ丘での生活との永遠の別れになるとは、露ほども知る由のないことであつた。

室野団長は、何事があつても自分は現地に踏みとどまつて懸命に仕事をして団員を督励し、同じ地にいる緑ヶ丘開拓団の実例を身近な教訓として、寸時の気持ちの緩みも起こさずに、気を引き締める気構えを示していたので、団員も敬服してどんなにつらい仕事にも一致団結して當たつていた。

当時の佳木斯は人口約十万人で、そこに駐屯する日本の部隊も兵力約十万人と言われており、ソ連国境に

近いだけに軍事上からも重要な地点であった。当然、飛行場もあり街内全体に活気があってにぎやかであった。日常生活においても便利で物資も比較的豊富であったが、生活費は限られていたので、緑ヶ丘の開拓団にいる人たちと同様に節約に節約の生活だったが、気持ちの上からはやはり明るく落ち着いた毎日を過ごした。

しかし、夫の仕事は複雑な事務処理や満拓公社や県事務所等との折衝業務、そして開拓団で必要とする物資の調達・輸送、他の開拓団との連絡のため未知の土地への出張等で、それこそ東奔西走の毎日で、よくもまあ体が続くと思ひ心配するほどで、家でゆっくりとくつろぐ時間もほとんど無い有様であった。夫が出張で不在のときには、私が夫に代わって事務を執ったり、連絡に行ったりして働き、正とゆっくり遊んでやることもできなかった。

あこがれの都会（そのころは佳木斯でも都会と思っていた）に来たものの、寂しく過ごすときが多くて、時々、団に帰ってみんなと会っておしゃべりをしたい

という気持ちになったこともあった。家族がそろって、朝出掛けて開墾作業をして夕方に帰ってくる、という生活がうらやましく感じることもあった。

やっぱり私は、山や野に囲まれて田や畑で土と一緒に働くことが性に合っているようだった。

一方、戦況はだんだんと悪化してきて、内地では毎日の様に空襲や艦砲射撃があり大変な被害を出しているようだった。福島でも浜通りの方はアメリカの軍艦からの砲撃であちらがやられたとの噂話が、開拓団にも入ってきた。実家の方は大丈夫だろうと思っではいたが、それでも心配で時々届く手紙を待ちこがれていた。手紙が来ないときは、何となく胸騒ぎがして心配になり、夜も寝られないこともあった。

緑ヶ丘でも義勇隊出身の若い人たちが、次から次に兵役適齢で兵隊に行き始めた。五月ごろになると開拓団でも四十五歳以下の人に動員がかかり現地召集として入隊していった。頼りにしていた立花さんも、東満の大肚子川の部隊に入隊してしまった。立花さんには同県人のよしみでいろいろと親切にしてもらい、なか

なか手に入らない馬鈴薯の種芋を分けてもらったりした恩義があったので、余計に他人事とは思えずに、その武運長久を陰ながら祈ったものだった。

そのころになるといろいろなデマが流れてきたが、ドイツが降伏したというニュースは本場で、大変にショックだった。これでソ連がどうするだろうかというところが人々の口にのぼったが、いつも結論的には、ソ連は日本と戦争をしないという条約があるので戦争を仕掛けてくることは無いだろうということで落ち着いた。

しかし、米軍による満州各地の爆撃はだんだんとエスカレートして回数も増えてきて、この満州も必ずしも安全では無いという話で持ちきりになっていたが、北滿はまだ爆撃もなく平和な生活が続いていた。

やがて、基督教開拓団も例外でなく、室野団長をはじめ四人の団員にも召集令状がきた。そして、ついに夫にも召集令状がきた。覚悟はしていたがやはりショックだった。夫には来ないようにと心の中でイエス様に祈っていたが、これはどうしようも無い事だっ

た。

召集令状が家に届けられたときには、夫は出張中で不在だった。帰宅してからは入隊時間に間に合わないの、出張先に連絡をとって、そこから直接入隊することとなった。

結婚してまだ二カ月、別れの言葉も交わすことのない出征だった。夫も、新妻とかわいい盛りの一粒種を残しての出征で、どんなに気持ち揺れていたことであらうと思った。後日、再会してからすぐにそのことを聞いたことがあった。

ついに、この広い広い所に取り残されてしまったのだった。

夫が出征する前だったか後だったか、今になるとちょっと思い出せないが、私のすぐ下の弟の初男が兵隊に行つて、新京に近い飛行場の警備隊にいるという連絡があったので、正を連れて面会に行き、久しぶりに肉親と故郷のこと、両親弟妹のこと、部落の様子などを楽しく話し合い、心が洗われた感じで帰ったことがあった。

夫が出征してからというものは、何となく騒々しい日々となり、精神的にも落ち着かない日の連続であった。

そんな日々と呼応するように、満人や鮮人の様子が見えだんだんとおかしくなってきた。今まで従順に私たちの言うことを聞いていたのが、日に日に反抗的な態度をとるようになってきた。

八月九日、ついに心配していたことが現実となってしまった。ソ連軍が大挙して国境を突破して南下してきたのだ。緑ヶ丘の開発団でも老人と女・子供だけが残って大混乱をきたしていた。十万人もいたと言われた佳木斯の軍隊も、いつの間にか見受けられなくなってしまった。

市街のあちこちから黒煙が上り、そのうちに真っ黒い飛行機が何機も上空に飛来して爆弾を落としたので、方々から火の手が上がり大火災となった。どうしてよいのか、正を抱くだけで何もできずただただおろろしていた。

そのうちに、北方から避難民が続々と佳木斯を目指

して下ってきた。佳木斯市街はそれこそごった返すような騒ぎとなった。そんなときに佳木斯の部隊に入隊していた室野団長以下四人の団員に会った。「ああ嬉しや、これで助かった」と思いきや、団長以下はこれから部隊と共に前進するとのことだった。団長は私に、「これを保管してください。後を頼みます」と言って風呂敷に包んだ貴重品を渡された。後ろ姿を見送りながら寂しい気持ちがかみ上げて涙が流れてきた。

団長に会ってほっと安心したのも束の間、どうしたらよいのだろうかと思ふと風呂敷包みを抱えながら再び迷っていたところに、今度は緑ヶ丘開拓団の竹崎団長以下の団の人々二十数人が避難してきた。私たちはこの一団と一緒に行動することとした。

佳木斯市街でも満人たちによる暴動・略奪が始まり大混乱をきたしていたが、何としても少しでも早く南下しなければならぬということで、荷物を整理し持てるだけ持って駅に向かった。駅も混雑していたが、必死になって最終列車に乗るよう頑張った。運良く乗

り込むことはできたが列車はなかなか発車しない。ここで降りたら再び乗ることは不可能だろうと思ひ、じつと我慢して座っていたが便所に行くこともできずにいた。食事も思うようには食べられず、子供たちはひもじさに泣きわめいていた。車内には満人も乗っていたので喧々囂々けんけんさうさうの状態であった。たまたらずに降りた人たちは、再び乗車することはできなかった。

そのうちにやつと発車したが、ソ連機が後から後から銃爆撃を繰り返すので生きた心地はなかった。トンネルに入ると、また、しばらく停車して動かなかつた。外は見えず車内は真つ暗で蒸し風呂のようで、子供は泣き騒ぐ始末で生き地獄のような状態であった。

私たちの乗った列車が、松花江の鉄橋を渡った直後にソ連機の爆撃で鉄橋が爆破された。後日になって知ったことであるが、私たちの後の人たちはこの松花江を歩いて渡ったそうで、大変な苦労だったそうだ。

佳木斯市街は次々と火災を起こし火の海となつており、その黒煙は天に達しておりまったく壮絶な様子だった。幸いに間一髪で松花江は渡ったが、相変わらず

ず頭上にはソ連機が乱舞して銃爆撃を繰り返していた。ときには銃撃を避けて全員下車し谷間に待避したこともあった。

このころになると一緒に佳木斯駅に集ってきた人々も散り散りばらばらになって、だれがどこにいるのかも皆目分からなくなっていた。列車もどこに向かつて走っているのか、どこに行くのかも分からなくて、ただ乗っているだけの不安と恐怖の避難行だった。

途中で弾に当たってしまった人や、病気が重くなつて息を引き取る人などもあった。

幸いにも、私と正は、竹崎団長の家族や立花さんの奥さんたちに守られての避難行で、心強いものがあつた。

そのうちに列車が脱線して動かなくなり歩くこととなった。昼間は満人などに見付からないように野宿し、夜になると歩き出した。幾日ぐらい歩いたか記憶にないが、みんなと離れないように歩いて行くことで一生懸命だった。

やっとたどり着いたのは、綏化の飛行場だった。そ

の飛行場の大きな格納庫のコンクリートの床上、手足を伸ばしたのは避難開始してから数日たった。大きな格納庫の中には、何千人という避難民が入っていた。荷物を抱えたままのゴロ寝で、食べることや水を得ることも大変だったが、それ以上に排泄物の処理が大変だった。それでも屋根の下で雨露がしのげることで大変にありがたかった。

綏化の飛行場のコンクリートの床の上で、日本が負けたことを知った。避難民には電撃のような衝撃波が起きた。「これからどうなるのか?」「私たちはどうすればよいのか?」「日本に帰れるのか?」「帰っても日本はあるのか?」などのことが一番先に頭に浮かんだ。今日までの避難行は、苦しいながらも、そのうちに日本軍が反撃すれば、また佳木斯に戻れるし、緑ヶ丘に帰れるという一縷の希望があったが、これからは全くその望みは無くなり、絶望的な避難行が始まるのだった。

数日すると、飛行場にいた日本軍の武装解除が行われた。この飛行場にあった飛行機も一カ所に集められ

て、ソ連軍に捕獲された。兵隊さんたちは、どこからか集まってきてはソ連兵に監視されながら連れられて行った。

日本軍の武装解除の有様を見て、しみじみと日本は戦争に敗れたのだということを肌で感じた。これからは、今までみたいにはいかないということを改めて覚悟をした。

どうやって夫が戻るまでター坊を守るかが一番の問題となった。

そのうちに、この飛行場格納庫の難民収容所にもソ連兵の「ダワイ、ダワイ」が始まった。時計、万年筆、眼鏡など目ぼしい物の略奪は激しく、ここまですうにか持ってきたのにと悔し涙にくれる人が多かった。この略奪がエスカレーターをすると今度は、「女を出せ」と要求してきた。恐ろしくて外には出られず、食べ物にも困ってきたし、飲料水もなく病気が蔓延した。飢えと病で死人が次々と出たが、避難途中で受けたソ連軍からの攻撃で負傷した人も多く、その傷が悪化して亡くなった人も多かった。更に、現住民の暴行

も日を追って激しくなってきた。

そんな環境の中であって、緑ヶ丘開拓団の仲間団長をはじめ四人の男性がいたことは、大変頼りとなり安心感があった。その男性を中心にしてお互いに必死で団結していた。

配給の食糧は高粱が主であったので、みんな腹をこわして下痢をしており、格納庫周辺は一面に汚物で汚れており不衛生極まりなかった。もちろん、水もなく体を洗うこともできずに虱が多発して「発疹チフス」が流行し幼児や子供が次々とかかってしまった。治療の方法もなく、もちろん薬もなく、栄養不良から体の抵抗力もなく、瞬く間に大流行となり大部分の年少者が死んでしまった。

頼りにしていた開拓団の四人の男性のうちの一人に井場さんという人がいた。井場さんは五十余歳の体格の良い人で一番頼りになっていたが、昔なにかの事故で右手首を失くしていた。そのためか独身で開拓団に入ってきた。その井場さんも下痢が止まらずにだんだんとやせて弱ってきた。

ある日、これ以上生きていても皆さんに迷惑を掛けるばかりだと言って、頸動脈を切って自殺をしようとした。

この世には神も仏もないのかと、みんなで嘆き悲しんだがどうしようもなかった。私も、体は大きくても自分と正を守って生きていくのが精いっぱいでも人の手助けをする力はなく、ただ、必死になって神に祈るだけだった。そんな時、「今ごろ夫はどこでどうしているだろうか」と、夫の身の上を案じ泣くばかりだった。

九月も半ばが過ぎると、北満は急激に寒くなっていく。飢えと病気の苦しさに寒さが加わってくると、それこそ生きていることが困難になってくる。ここには、座して死を待つばかりだという意見が出て、一日でも、一時間でも早い方が良く、今のうちに南下しようということになり、すし詰めの貨車に乗ってハルビンに向かって南下した。しかし、ハルビンも避難民で溢れていて収容所に収容される見込みもないので、更に南下を続けて新京に向かった。この移動の間

にも、多くの死者が出て、遺体を列車の止まる度に線路のそばに埋めるか、時間の無いときは置きざりにしていた。この南下中に、それまで一緒だった立花さん家族の姿も見えなくなった。

新京でも生活することができずに、更に奉天に向かった。

奉天も厳しい寒気で、暖をとることもかなわず、そのうえ食糧の配給は途切れがちで、飢え死にする人が続出した。恐怖よりも絶望感の方が強く、いつ私たちもそうなるのかということだけで日が過ぎていった。避難民の人数も目に見えて減っていった。

とうとう私も正も、ここで病気になってしまった。収容所の学校には、薄汚れた病人だけが力なく動いていた。

若い女は、中国人の家に住み込みで行く人も多くいた。その人たちは、そのまま中国人と結婚して戻ってこなかった。中国残留婦人と言われている人である。

収容所には、「嫁に欲しい」「子供が欲しい」といってくる中国人や、女を求めるソ連兵が出没していた。私

もみんなと同じように頭を丸くして、顔には真っ黒く墨をぬり、服も男物のような服を着てどこからみても男の格好になった。

私は、体が大きくて元氣そうに外形は見られていたので、いつソ連兵に襲われるかもしれないと思い、夜も昼もびくびくして過ごしていた。まったく生きた心地のしない生活だった。こんなに悲しい日々がいつまで続くのか、このまま救われることはないのだろうかと思つては、涙が止まらなかった。

お国のためと思つて満州まで来た私たちを、神は助けてくれないのだろうかと思うと、神への祈りにも力が入らなかつた。信仰した基督教も、尊敬している牧師様も、ここではその力を發揮してもらえないのかとがっかりしていた。そんな気持ちでいるときには、時々見回りにくる避難民の世話をする人がイエス様に見えたり牧師先生に思われたりして、ちょっとした間の心の救いになっていた。

正の一日も早い病氣快復を唯一の望みとして、病後の体に鞭打ちながら働きに出ていた。そんな有様の奉

天での避難民生活がしばらく続いていたが、正の病状はあまりよくならない。しかし、何とかして日本に連れて帰りたいという念願だけが、私の気持ちを奮い立たせていた。

ついに帰国の日がきた。待望の帰国で周りの人々は喜びの顔であったが、私は足が重かった。今日までのいろいろな苦しみの中で生きる支えであった正の病状が悪化して、ほとんど口も利かなくなり食べることもできずに、ただ眠ったままの状態となっていた。

喜びの人々の列に入って、力なくタラップを上った。船室にやっと座った時、正の命が消えてしまった。私は自分の命に代えてでも、この子だけは日本に帰りたいと思って今日まで守ってきた。私の命が、私より先に死んでしまった。呆然として涙も出なかった。

引揚船では、「水葬の札」で遺体を吊ってくれた。甲板から毛布にくるんで海に投げ入れられた正は、徐々に沈んでいった。今日までの思い出が走馬燈の如くに目の前をよぎっていった。開拓団のマスコットで

あったター坊も、日本の土を再び踏むことなく、踏む直前に海の藻屑となってしまった。

沈みゆく正の上を、引揚船はぐるりと回ってくれた。私も、海底に沈んでいくような苦しさで胸が張り裂けんばかりで、大声をあげて泣いた。

しかし、水葬とはいえ皆さんの手厚い見送りの中で弔うことのできた正は、まだまだ幸福だったと思うようになった。避難行の中で死んでいった多くの人は、線路脇とか、名も知らぬ野原とか、収容所の裏山とかに埋められたままに置いてこられたのである。埋められた人はまだ良い方で、そのまま捨て置かれて鳥獣に食べられてしまった人も多くいるのだから、その人たちの肉親はどんな思いでいるかと考えると、正はまだ幸せであった、と思うようにしていた。

私は、心の中が空っぽの思いで内地の土を踏んだ。下船後のいろいろな手続きを終えて郷里に向かったのは、昭和二十一年の春まだ浅きころであった。

私は、真っ先に本宮町の教会の牧師館の戸をたたいた。今の私にとってはイエス様の胸に抱かれることし

か、心の救いは無いような気がしていた。牧師館は暗かった。

しばらくして人が出てきた。井関牧師であった。牧師は、「今ごろ、どなたですか、何か用事でしたら明日の朝においでください」と言った。まだ、私であることは分からないようだった。それもそのはず、汚い男物の服を着て、ボロ切れて頬被りをしているかっこうを見たら、だれでも乞食と思うのが当たり前だろう。牧師もすぐにそう思ったのだろう。

「秋山ハルノです。今、満州から引き揚げてここに来ました」と言った。牧師はびっくりして、私の顔をしげしげと見つめて、「ハルノさんだ。本当にハルノさんだ。良かった。良かった」と涙声で言った後、私を強く抱いて声を上げて泣き出した。私も涙で声がつまってしまう、後の言葉が出なくなり、ただ、牧師の胸にすがるだけだった。それからすぐに家の中に入れてもらい、風呂に入り温かな食事をいただき、やっと帰ってきたという実感がわいてきた。

礼拝堂で深い深い祈りを捧げて、正の冥福と夫が無

事に早く帰ってくることを神に祈った。

それから、今日までのことを包み隠さず洗いざらいに牧師に話し、胸につかえたものが流れてしまうと、急に疲れが出て睡魔が襲ってきて、牧師館で寝かせてもらった。

井関牧師は当時、国策に協力して満州へ開拓の花嫁をたくさん送り出したことを深く後悔し、責任を強く感じていた。引き揚げてきた人のために、県庁と交渉して安達太良山麓に開拓地を設けて、そこを平和村と名付け、「信仰と開拓」をモットーにして、引揚者を入植させる世話をしていた。

秋山家に嫁に行った私であるが、夫がまだ帰ってこないのが秋山家に行くこともできずに、玉井村の実家に一時身を寄せることとなった。父母もいろいろなことから弱っていたが、父は優しく迎えてくれた。しかし母は、今までの苦労のためか、年の割には体が弱っており視力も落ちていて、愚痴っぽくなっていた。

「だから満州さ行くなと言ったでねえか！ 満州さ行かなかったら、今ごろは何ぼか良かったべに、おれ

は大反対だったのに、お前がどうしても満州さ行くと言うのでやったら、こんなことになって！」と、繰り返し言っっては泣く有様だった。

私は、「母ちゃん！ 私は希望を持って、喜び勇んで行ったのだから、今でも後悔はしていないよ！」と答えていた。本心そう思っていた。それでも母は、毎日毎日同じことを言い続けていた。それを柳に風と受け流しているうちに、私の心もだんだんと強情になってきた。

「よし！ へこたれるものか。自力でまた、幸福をつかむのだ」と、心の中に勇氣がわき出てきた。希望に燃えて大陸に渡った理想は、意地でもやり直すしかない。日本は負けたが、祖国は残っていてこうして帰れたのだ。帰って来ただけでも拾いものだ。避難途中で悔しい思いをしながら死んでいった人々のことを思えば、本当に幸福なのだと、心に決めて働くこととした。

井関牧師からは、平和村に入って一緒に仕事をしようとは何度も誘われたが、夫が帰ってきたらそうしたい

と話した。

一緒に引き揚げた立花家の人や、避難中に知り合った人も平和村に入植した。

避難中に患った体もまだ後遺症があり、体調は十分でなく疲れが体の芯に残っているようだったが、本宮町の鋳物工場に就職して、真っ黒になって男に負けずに働いた。盲腸炎を再発して入院・手術をしたが、それでも退院したらすぐに働きに出た。煙とはこりの中の重労働だったので、そのうちに肺を痛めて病院通いが始まった。

何よりも井関牧師の激励と神への祈りが、心の支えとなっていた。夫が無事に帰ってくる日までと、一日刻みで頑張った。

新京の警備隊に面会に行った弟の初男も、無事にシベリア抑留から帰ってきた。日が経つにつれて知っている人も帰国してくるようになった。だが夫からは、まだ何の便りもない。昭和二十三年の十二月に、立花開さんがシベリアから帰ってきた。久し振りの再会で、お互いに手を取り合っって涙を流した。立花さんが

無事に帰ってきたので、何かしら私まで気持ちが悪く落ち着き、体も元気になったような気がしてきた。

忘れもしない、昭和二十四年の夏、その日は特に暑かった。待ちに待った夫が、シベリアから帰ってきた。四年間のシベリアでの強制労働と栄養失調で、立派な体だった夫も、さすがに骨と皮ばかりにやせて顔色も悪かった。四年間の重労働がどんなにつらかったろうと思うと、私の過ごしてきた引揚げの苦労など足元にも及ばないことだろうと思った。

最後の組での帰還だったので、体力も精神力も使い果たしてしまったのだろうか。夫はしばらく静養していたが、正の死んだことを話したときは、傍目にも分かるほどに落胆して声高に泣いていた。私も、私が殺したような気持ちになり悲しく泣いた。

少し元気が戻ったところに、私は平和村のことを話し、夫婦でだれにも負けない理想の農家を経営しましょうと、今まで考えていたことを全部夫に打ち明けた。

当然に夫は賛成すると思っていたが、意外や、その

答えは「農業はやらない」という返事だった。私がかっかりして目の前が真っ暗になった。今日までこのことを生きがいとして一生懸命に過ごしてきたのに、これが断ち切られたのだった。私が死ぬようなつらい思いに耐えて今日まで生きてきたのは、これからの私たちの新しい生活をかけていたからだ、いくら話しても夫には分かってもらえなかった。

泣いて訴えても、夫の心には通じなかった。

シベリアでの生活が、夫の性格を変えてしまったようだった。それに正の死が重なり、気持ちを意固地にさせてしまったのかもしれない。信仰は何の役にもたない。聖母マリア様でもイエス・キリストでも夫の心は変えられなかった。

夫は生まれ故郷の横浜に去ってしまった。昔は板金業だったので、その仕事をするつもりだそうだ。

私は急に精神的・肉体的に疲れが高じ、体調が狂って初期の肺結核となり、須賀川の結核療養所に入り数年間の療養生活を過ごすことになってしまった。平和村での開拓も夢のまた夢となった。

私は、何のために開拓花嫁として、勇躍満州に行き、何のために人生の一番花の時期を死ぬような苦難に遭い、何のために引揚げ後の苦しい環境を泣く思いで過ごし、そして何のために結核という世間から嫌われる病気となり、闘病生活を余儀なくさせられたのか。

これも、戦争・敗戦・避難行・引揚げという大きな時代の流れの中にいた一人のか弱い女の定めであり、生き方だったのか。

国と国の争いは、ただそれだけにとどまらず、掛け替えのないその人の生き方も変えてしまう恐ろしいものなのだ。平和になった今、こんな思いをしみじみと感じている。

中国残留姉妹の惨酷記

福島県 三瓶キノ

一 渡満までの我が家

私は、福島県の旧安積郡大槻町で大正十四（一九二五）年に、立花開助の三女として生まれましたが、兄三人、姉二人、そして弟が三人に妹が一人という大人数の兄弟姉妹で、その中でいろいろと採られながら育ちました。当時は、昭和大恐慌の真っ直中で農村はどこでも貧しい生活をしていましたが、「貧乏人の子だくさん」である我が家でも同じことで、貧乏農家では、毎日の食べることだけでも大変な苦勞をしていて、みんなひもじい思いをしていました。

そんな生活の毎日でも、私はあまりつらいとも悲しいとも思わずに育っていたのは、生来の剛直な性格のうえに、体は小さかったが丈夫であったので、家族のみんなから割合にかわいがられていたゆえかもしれません。住まいも衣食もひどい生活なのにと思うが、隣近所どころの家もみんな同じなのだから、これが普通で仕方がないことと思っていました。しかし我が家では、柿・梨などの果物が豊富で近所にはあまり無かったので、それだけでも私たちは、少しは幸福なのだと考えていました。貧乏な農家同士は、みんな仲が良